

# 街路樹

10月

共生社会を目指して

「居場所づくり」と「絆づくり」



## ～友から学んだこと～

障がいの有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会を目指し、障がいのある人に対する理解の促進を目的とした事業の一つに、内閣府が主催する「心の輪を広げる体験作文」があります。過去の入賞作品を検索していた私は一つの作品に目が留まりました。それは、平成23年度に中学生部門で最優秀賞(内閣総理大臣賞)を受賞した作品でした。概要説明を交えながら紹介したいと思います。

「僕には、絶対に叶えなければならない夢があります。」という書き出しで始まったその作文は、「僕には体に障害を持った友達がいます。」と展開し、障がいを持った友達への紹介に移ります。体の右半分がマヒしていること、嚥下障害もあり刻んだものにとろみを付けて食べさせてもらうこと、胃ろうからチューブを通して水を入れてもらうこと、声が出ない・文字盤も使えないから自分の意思を伝えることができないことなど、友達の様子が細かく書いてあります。

友達になつたきっかけは、小学五年生の時に出場した野球の試合だったそうです。ところが、中学生になり、またその友達がいるチームと対戦することになった時、その友達の姿はなく、病気が原因で、先に書いたような障がい者になっていたことがわかったのです。

ここから先は、実際の作文で紹介します。

そんな友達を見て、初め「かわいそう」だと思っていました。でも、一生懸命にリハビリに取り組んでいる友達の姿を見ていると、僕は「かわいそう」と思うのは良くないことだと思うようになりました。なぜかという、人に対して「かわいそう」と思うことは、その人を見下しているように思ったからです。友達は障害を持ちながら一生懸命に生きているのに、上からの目線はごうまんで大変失礼なことだと思いました。このことは友達に対することだけではなく、全ての障害者に対して共通する気持ちです。(中略)

僕はお見舞いに行くと友達の車いすを押して出かけることができますが、よく他人の視線を感じるがあります。自分と違う人を見ると違和感を持つ人が多いのだと思います。でも自分と人は違って当たり前なのだし、その他人を認めることは最も大切なことだと思います。世の中のすべての人が自分と違う他人を受け入れることこそ、差別のない社会の実現につながっていくように思います。

友達のためにも、僕は野球を一生懸命頑張りプロ野球選手になり活躍します。

この作文を書いたのは、当時、中学3年生だった中村誠君です。彼の名前を覚えている人は少ないかもしれませんが、今年の夏の甲子園大会で優勝した大阪桐蔭高校野球部のキャプテンであり、決勝戦では逆転打を打ちヒーローとなった中村誠君なのです。

現在「交流及び協同学習」を積極的に取り入れている学校は少なくありません。しかし、その取り組みは、特別支援学級や特別支援学校に在籍している児童生徒を集団で学ばせたい、社会性を育てたい、地域で学ばせたいという目的に重点が置かれていないでしょうか。私は、通常学級の児童生徒に対する目的こそ重点に置くべきだと考えています。障がいを持った友達をどう受け入れ、どのように接していくかを学ぶことで、中村君のように他人を認め、優しくできる人を育てることになり、共生社会の基礎になるのではないのでしょうか。

是非、彼の夢が叶ってほしいと願わずにはいられません。



いじめをなくすためのキーワードとして、「居場所づくり」「絆づくり」があげられます。

「居場所づくり」とは学級や学年、学校を児童生徒の居場所になるようにしていくことです。学級が危険のない安全な場所であることはもとより、そこにいることに不安を感じたり、落ち着かない感じを持ったたりしないという安心感も重要です。そのためには、授業改善から始めていく必要があります。また、小学校の低学年のうちから、授業中は正しい姿勢を保つことに慣れさせたり、忘れ物をさせない指導をしたりすることも大切です。そうでないと「わかる授業」を行っていても集中力が途切れて「わからなくなる」こともありえます。単に「居心地よくしてあげる」ということではなく、「子どもが困らないようにする」ための場所づくりと考えましょう。

「絆づくり」とは、子ども自らが主体的に取り組む活動の中で、互いのことを認め合ったり、心のつながりを感じたりできることです。子ども同士と一緒に活動することを通して自ら感じとっていくものが「絆」であり「自己有用感」ですから、「絆づくり」を行うのはあくまでも子ども(同士)です。全員の子どもの「絆づくり」を促すためには、組織的・計画的な教師側の働きかけが不可欠です。一言で言うなら、すべての児童生徒が活躍できる場を準備することです。

「きちんと授業に参加し、基礎的な学力を身につけ、認められているという実感を持った子ども」は、いたずらにいじめの加害に向かうことはないはずで



国立教育政策研究所「生徒指導リーフ増刊号」より

## 「子どもが変わる姿こそ」 教育相談室より

来所された保護者の方と話をしている、こちらの提案に頷きつつも「でも…」と納得できない様子を示す方がいます。学校ではどうでしょうか。子どものことを考えてやっていることをなかなか受け入れられない・受け入れてくれない保護者の方がいませんか？

そんな時どのように対応すればよいのでしょうか？

理解して下さるまで話すことも必要ですが、1番は、子どもの姿が保護者の望む方へと変わることでないでしょうか。このことで先生方の教育方針が受け入れられるのです。

「うちの子、苦手だったのにこんなことが出来るようになった。」「だんだん落ち着いてきた。」「笑顔が多くなってきた。」等々、保護者にとっては、何よりも嬉しい出来事です。そして、先生が意図していたことに気づいてくれるはずで

自信を持って実践し、子どもをよりよい姿に変えてみませんか。

